

## 『街角の共育学～無関心でない、あきらめない、他人まかせにしないために』

をめぐっての対話 2020年9月19日

※下記 URL からユウ - チューブ動画を試聴できます。

<https://youtu.be/Yk07pdHSpQ8>

松井 直哉 (スタッフ)

第34回学びの会は、私が松森さんの最新著書の『街角の共育学』を読んで触発された言葉を「お題」として提示し、「世間話」をしようと思って企画した。私の当初の意図は『街角の共育学』からスタートするものの、『街角の共育学』から離れることをいとわない「世間話」にしようというものだった。だが思ったほど離れることができなかつたし、終わった直後は自分の言いたいことが十分言えなかつたという感じがしていた。まあ『街角の共育学』からピックアップした言葉が「お題」なのだから、松森さんは当然著書の内容に記憶を戻し話す。だから、『街角の共育学』から離れられなくて当たり前なのだけど。記録カメラが動く中、話の進め方のバランスも考えなければいけないし、その上自分の言いたいことを言うというのはかなり難しかったというところだろう。

一応進行を任されているので、少しでも話が途切れて間があくと、自分が言葉をつなぐのか誰かに振るのか打ち切って次の話題に変えるかの判断を迫られているようで焦ってしまう。松森さんに振ると松森さんは『街角の共育学』の方に話を引っ張っていく。かと言って私が話をとって延々としゃべるわけにもいかない。相手の言うことを聞き、こちらの言いたいことを伝え、それをすり合わせて新しいものを作るという作業は面白いけど、今回は私にとってかなり難しい作業だった。一般的に進行役と発言者が分かれているわけが改めて良く分かった。

お酒を飲みながらの「世間話」なら得意なのだけど…。(相手は迷惑がっているのかもしれないけど)

松森 俊尚 (スタッフ)

いつも思うのだけれど松井さんの話とはとにかく面白い。例えば「子どもたちは話を聞かなくなったのか」のお題のときに松井さんはこんな語りをします。——話を聞けへん子どもたちが悪いんっちゃう。話し手の問題や。僕が小学校の時に一番覚えてるのは戦争の話やねん。沖縄出身のヒガ先生が、沖縄戦のとき敵から逃げるために向こうの島に向かって泳いでたとき、アメリカ兵につかまったという話。おんなじ話でも、僕らは何べんでも聞きたかつた。僕は時間さえあれば子どもらに自分の人生を語ってた。高校のときに自分の家が火事になった話。消防車が来て消火するのを手伝ったとか。弟が交通事故にあったことや、小さい時に川でおぼれた話とか。そんな話をする子どもらはすごく聞くねん。テストする時間がもったいないねん。その時間があつたら、子どもらに自分の話をいっぱいしてやりたいねん。——というように、松井さんの話はいつも教育現場から、子どもの実態から、自分の生活経験から言葉を選んで語ります。だから私たちは話の一つ一つにうなずきながら、納得し、その面白さに魅了されてしまいます。

こういうものが「対話」というのだろうと、改めて感じました。

拙著の『街角の共育学』を通して豊かな対話が生まれたことが嬉しくてたまりませんでした。